カントの先天總合判斷の最高原則について（承前）

大西友太

五

カントの先驗統覺の缺點は總合的統一を見てその統一に於ける矛盾契機の內在を見ぬ點にあることは既に述べた如くであるが、ヘーゲルのイデアの辨證法の缺點もその辨證法的自覺に於ける絕對的統一を見て矛盾契機の內在を見ぬ點にある。イデアとエクジステンツとの聯關の認識を明かにせぬ辨證法は今日から見れば斯ういふ外ない。問題はここにある。イデアは多樣を止揚する點に於てその對立性を廢棄せしめて永遠と同一化するのであるから、多樣その物はイデアの要求すべき象徵的空間の周邊にまで引き寄せられて居るに過ぎぬのである。隨つてその限りに於てはヘーゲルのイデアの辨證法的自覺に於ては絕對統一といつても認識論的にいへばなほ超越的形式的統覺に過ぎぬのであつて、存在論的にイデアはなほエクジステンツの眞理をつくせるものとはいへぬ。既に屢々述べた如くイデアに於て有限が絕對的眞理に達するといふことはヘーゲルの思辨哲學の根本的特徵である。併し無限が眞理その物であるといふことは同時に有限が無限の眞理として把握せられる場合でなければ適確にはいはれぬことであつて、或る物の眞理といふことは有限を無限に止揚し、隨つて有限がその有限を廢棄する點に於ていはるべきことではなく、有限その物が

その存在するまゝそれ自身に於て無限であるといふことでなければならぬ。故にヘーゲルが有限がイデアに於てその眞理に達するといふことをもつて事實上イデアに於て有限がその對立性を廢棄するものと考へ、有限の對立性を以て眞理でないと考へたといふことは改訂せらるべきものでなければならぬのであつて、有限を無限に止揚せるヘーゲルの認識に於てはイデアをエクジステンツに限定し、その範圍内に於て有限的對象の認識に於て無限を發見せねばならぬ必要を有する。カントが物自體の意識的代表としての非規定的質料の統一に於て認識を考へたこともこゝに深き意味を有するものでなければならぬ。有限の本質といふときは絶對的イデアを契機とするものであると共に存在するものに關する吾々の知識の絶對性を契機とするものでなければならぬのであつて、その限りに於て吾々の知識は絶對であるを得るのであるから、眞の認識に於てはヘーゲルのイデアそれ自體が一度は否定せられて全く新らしきエクジステンツとなり絶對的に固有なる客觀的存在となれるものを媒介とせねばならぬ。存在するものそれ自體は對象であるけれども、これはイデアの單なる寫像ではなく、絶對的に獨立なる新らしき存在でなければならぬ。カントは第一版で物自體の客觀的實在を否定したけれども、第二版に於てこれを肯定したといふことはその論理の徹底がこゝに達したゝめでなければならぬのであつて、ヘーゲルの精神の直接的辨證性はカントの圖式概念を擴張せる辨證法的圖式と結合する點に於て有限的對象の無限的存在を承認する必要がある。

勿論對象である以上は絶對といつてもイデアそれ自體の否定體であることは否定すべからざるところであつて、その限り有限的對象は本質的にはイデアと對立するエクジステンツに於て求めらるべきものであることは斷るまでもないところである。この點に於て私はヘーゲルがイデアのエクジステンツを確めずして只イデアの認識に於てのみ眞理

を求めんとする態度には根本的に反對せざるを得ぬのであつて、對象の認識といふことはヘーゲルでは實は嚴格なる意味に於ては考へられぬ。das Existierende selbst が ein an sich für uns Seiende であるといふことはヘーゲルでは嚴格なる意味では考へられぬのを遺憾とする。ヘーゲルに於ける哲學の問題はこのエクジステンツを明らかにしてその絶對的超越を承認すると共に、その絶對的獨立の物自體的世界が自己分裂に於て純粹自己意識の絶對的内在となるべきイデアの否定の論理を徹底するにある。それだけにヘーゲルのイデアの辨證法には空間を媒介とする時間の存在論的圖式がなければならぬのであつて、これによつてエクジステンツがイデアの絶對的否定體として、イデアと絶對的に異なれるものであると共に絶對的に同一なるものであることを知るところに、ヘーゲルのイデアの認識がイデアとエクジステンツとの聯關の認識として眞の認識であることを具體的に明らかにすることが出來るのである。この具體的認識にはイデアとエクジステンツとの背面に於ける統一としてイデアそれ自身の自覺の知識とこの知識に關する吾々自身の絶對的知識の統一がなければならぬのであつて、私の本節の課題はこの問題の解決に於て眞の認識の原則を見るにあること既に前節の終りに一言したところである。ヘーゲルからいへばこの統一に於て絶對認識として絶對的對象の構成を新らたに觀察せねばならぬ必要がある。ヘーゲルはイデアの直接的辨證性に於て汎論理の形而上學的認識論を唱へる立場からなほ深く進んで攻究せられ、カント的に見てイデアの超越的形式的統覺に止まれる點を内在的具體的統覺に訂正せねばならぬのであつて、ヘーゲルの絶對精神の辨證法的自覺としての絶對的認識に對してカント的解釋を加へてその總合觀念を明らかにするところに眞の認識論があるのである。

カントの認識論でも『先驗分析論』で論ぜる如き感性的内容の範疇的構成が眞の問題ではなくその根柢に認められる

物自體の本質的把握としてその對象的構成が問題でなければならぬのであつて、有限的對象の認識論も物自體的對象それ自體とこの對象の中に故郷を發見すること能はざる主觀それ自體との直觀的統一に溯らねば解決されぬ。これがカントの眞理であつて、ヘーゲルはカントのこの直觀から出發するのである。ヘーゲルの哲學はカントに於ける思惟と實在との關係卽ち感性的多樣の背後にある物自體と思惟の範疇としてのイデアとを本來矛盾契機として承認すると共に、カントの總合に於てこの對立契機をなくした點に着目してこれを承け繼ぎ、この兩矛盾契機の對立の絕對的統一を承認する點にその哲學の出發點を求めると共に到着點を求めたのである。ヘーゲルが辨證法哲學者であつて、本來的に矛盾契機の存在を認めるに拘らず、一元論を以てその哲學の根本的特徵とする理由はこゝにあるのであつて、思惟と實在との絕對的統一といふことがヘーゲルの哲學に於ける根本的特色である。その限りヘーゲルはカントの人間理性を世界理性に轉廻せる點に出發して居るのであるから、イデアがエクジステンツであるのが一體その哲學の根本的事實でなければならぬのであつて、ヘーゲルでは一切をイデアに止揚して見る點に於て一切がイデアと絕對的に同一的なるエクジステンツでなければならぬ筈である。その限りに於てイデアがエクジステンツを制約するといふことは有力原因によるのでもなければ充足理性によるのでもない、只端的にイデアがエクジステンツその物である點に於てこれを制約するのである。それだけにヘーゲルではこのイデアがエクジステンツを制約するといふことは一切をイデアに止揚し有限を無限に止揚せる場合として、一切の有限がその有限的對立性を廢棄せる限りに於ていはるべきことであるといふことは强く記憶すべき事柄であつて、全くこの兩者が絕對的に同一性に於てあるから認められるのである。イデアによつて制約せられたるものとしてはエクジステンツはイデアと絕對的に同一であつて、この同一性

に於てはイデアは制約者として絶對である。一切の有限的に存在するものをしてその有限を廢棄せしめてこれをイデアに止揚し、これと同一化するといふ點に於てイデアが絶對として全存在を支配するといふのがヘーゲルの哲學である。

併し又他面から見るときはエクジステンツも絶對であつて、それ自身の述語を有せる主體である。自己の述語を自己自身から發展するものでなければならぬのであつて、有限的對象もそれ自體に於ては絶對でなければならぬ。この意味に於て對象はイデアの單なる寫像ではなく、プローチンのいへる如く弱められたるイデアではない。イデアの否定されたる絶對としてイデアに對しては全く新らしき固有の存在を有する絶對である。イデアに止揚せられたるものなる限りエクジステンツはイデアと絶對的に同じものとしてこれと同一化せられるけれども、イデアそれ自體は既に前節でも述べたやうにその直覺的なる點に於てもたねばならぬ自己矛盾的契機によつて、自己を否定して自己と絶對的に異なれるエクジステンツを承認しその獨立存在を肯定せねばならぬのであつて、認識はイデアの絶對自覺であると同時にこの自覺に關する吾々自身の知識でなければならぬといふことは、ヘーゲルのイデアの認識が本來イデアとエクジステンツとの聯關の認識でなければならぬ以上は必然的に吾々の承認せねばならぬところである。ヘーゲルの辨證法は本來この點に於て吾々自身のもつべき認識として新らしく考へられねばならぬのであるけれども、既に述べた如く辨證法的圖式概念による演繹と結合せぬためにその辨證法的自覺の眞の領域から有限的對象を閉め出して、イデアが單にその象徴的又は想像的空間に於て形式的統一としての統覺を有するのみであつて、認識論的に見て第一この獨立的對象としてのエクジステンツの內在的具體的統一の自覺存在論でない點に大なる缺點を有するのである。故

に嚴密に論ずるときはヘーゲルではイデアが絶對自覺なる點に於て für uns an sich であるといふことがいはれてもエクジステンツが an sich für uns であるといふことはいはれぬ。その限りヘーゲルに於ては辨證法的自覺に於て物自體の感觸としてのカントの認識問題を徹底する立場はもつて居らぬといはねばならぬ。カントが總ての表象に伴ふといつた「私は考へる」なる命題にはヘーゲルは正確には觸れることなくしてその認識問題を解決せんとする點に於て、基體の論理を缺ぐために必然的にその辨證法は獨逸觀念論の神祕主義に走つて終ふ缺點を免れぬと共に、イデアのエクジステンツを見ぬ辨證法はその自覺に於て超越的形式的認識論に止まつて終ふことは如何にしても否定しがたき缺點でなければならぬ。隨つてヘーゲルの辨證法では實は純粹實在とか具體的生命又は純粹自己意識とかいふ如き哲學の中心問題にはまだ觸れて居らぬといはねばならぬ。私が前にイデアとエクジステンツとの聯關の認識に於てヘーゲルは高次のエクジステンツの立場に立ち純粹實在を見ねばならぬといつたのはこの點をいつたのである。

イデアの否定としてのエクジステンツといへば勿論獨立の存在を有せる客觀的主體であつて、一切の可能的述語をそれ自體の中に有せる本質的實在である。超越的法則によつて支配せられたる死物ではない。故に吾々は客觀的世界を正當に理解せんとするときはこの固有の方法によつて存在せるものとして有するところの本質的祕密を探らねばならぬ。普通カントでは對象は構成によつて見られるものであつて全く結果であるといはれるけれども、この構成に豫想されたる物自體的對象がなければならぬのであつて、構成はこの對象の構成である。勿論この對象それ自體としての存在に於てはイデアではエクジステンツが直接その姿を失つて居る如く、エクジステンツその物が無制約者であつてイデアは制約せられたるものゝ立場に立ち直接的存在の姿は消滅して居らねばならぬ。イデアそれ自體はその第一

次的存在に於ては生命を有する如くエクジステンツそれ自體もその第一次的存在に於ては生命を有するものでなければならぬ。而して認識といふときはイデアの自覺であると同時にこのエクジステンツの認識でなければならぬのであるから、必然的に直觀に於てこの兩者を直覺的に包含する場合でなければ見られぬのであることは勿論であるけれども、只單に直觀に於てこの兩契機が直接的絶對的に統一せられ、隨つてその限りに於て直觀することが同時に思惟することであるといふやうに說くのではなほ不十分であるを免れぬ。この點に於て既に述べた如くカントの理知的直觀若しくは神的悟性の概念に不徹底の點のあることは勿論であつて、認識論である以上はこの直觀に於ける直接的統一を認める中にも、その直觀に於てはイデアそれ自身の自覺を見ると共にこれとエクジステンツその物の總合的知識との統一を明らかにせねばならぬことは斷るまでもないところであるから、この直觀に於ける認識といふことはイデアの自覺に於けるエクジステンツの總合を明らかにせねばならぬ。こゝにイデアの絶對自覺とこの自覺に關する吾々自身の知識としての主體的エクジステンツの知識との統一が問題とならねばならぬ理由があるのである。

ヘーゲルの認識論では一切の有限を無限に止揚せる眞理に止まるのであつてその限りイデアは全く超越である。勿論カントの認識を深く內面に切り下げて物自體の感觸による多樣の統一をイデアに於て見るのであるから、その限りに於てヘーゲルのイデアは意識內存在であつて、超越といふことは事實この內在的超越であるといはれぬではない。しかしこれはカント的意識の超越的絶對性に對していふだけであつて、有限を無限根據に溝ぎ着けたとはいはれるけれども、その無限根據その物が有限の規定として有限を以て無限の眞理たらしめる內在ではない。既に述べた如く無限は眞理その物であつてもこれは有限が無限その物の眞理であるといふことを明らかにしたる上でなければ積極的に

は明らかにすることが出來ぬのであつて、これを明らかにするには無限その物の有限に對する內在的規定を明らかにせねばならぬのであるから、ヘーゲルでは一切をイデアに止揚する以上にイデアその物の存在的規定を明らかにせねばならぬ。その限りヘーゲルではイデアその物の絕對自覺を明らかにし、イデアの方面に於ける直觀それ自體の自覺を明らかにせねばならぬと共に、この直觀に於けるイデアの否定的契機たるエクジステンツその物の總合をイデアのこの絕對自覺に於て明らかにせねばならぬ。こゝにヘーゲルはそのイデアの絕對自覺とシェリングの旣に述べた國家・キリスト教團・法律・藝術等々としての主體的自然哲學とを結合する必要があるのであつて、認識論としてはイデアそれ自體の絕對自覺の於てある場所とも見らるべき象徵的若しくは想像的空間に於てエクジステンツその物の總合的統一を明らかにせねばならぬのである。ヘーゲル自身はイデアの辨證法的自覺に於ける對象の統一を以て形式的に見る點に於てこれをイデアの象徵的空間の周邊に止めることなく、この空間その物の中に引き入れてこれを現實具體性に於て統一せねばならぬのである。具體的なるものが生命であるといふならばこの具體的なるイデアの絕對的統一その物が生命であるといはねばならぬ。イデアもエクジステンツもそれ〴〵その獨立的契機に於て生命を有するものであるが、眞の生命はこの兩契機の直覺的直觀の內在的總合の具體性に於て求めねばならぬのである。この總合に於て客觀的世界それ自體としての存在とイデアの自覺とが絕對的に統一せられ、客觀的世界統一原理としてのイデアと主體的世界としてのエクジステンツとがそれ〴〵その否定的契機を維持しながら絕對的に統一せられる。純粹自己意識であると同時に客觀的世界である。有限的對象の客觀的認識の統一の根柢にはかゝる純粹自己意識として觀念論と實在論との合致せる純粹實在の行爲的主體があるのであつて、この主體に於ける總合的性格を明らかにすることが

ヘーゲルの課題であると共に、ヘーゲルがその辨證法に於てカントの先驗統覺的思想を容れねばならぬ必要を有する。

既に述べた如くカントでは普通には對象は構成であると考へられるけれども、この構成に豫想されたる絶對的對象がなければならぬのであつて、この對象の構成が絶對者の絶對認識に於て見られねばならぬといふのが元來カントの認識論の眞意である。ヘーゲルのイデアの辨證法的自覺は既に述べた如く超越的であつて、多樣をイデアそれ自身の存在論的空間の周邊に止めるものである。隨つて多樣をイデアの外に置き、イデアそれ自體は一切の差別のない球の如きものである。單一的統一體であつて多樣的統一體ではあり得ぬ。全く形式的現象學的である。その限りヘーゲルでは嚴密にいふときはイデアとエクジステンツとは互に否定的であるとはいふものゝ單なるエクジステンツの否定であつて正確に超越であるといふことも實は困難である。超越といふときは否定しながら肯定してその對立者を自己の中に包みて活かすことでなければならぬ。隨つてイデアはエクジステンツに否定されながら却つてその否定を自己の肯定の媒介に轉換することを含むものでなければならぬのであつて、イデアの自己肯定といふことはこの意味に於て超越的であると同時にその超越的なる點に於て必然的に內在的であつて、論理の超越が內在である點に於てイデアが超越であると同時に內在でなければならぬ。併しこゝに到るときはヘーゲルの如き超越的合理的なるイデアの論理には大なる誤謬若しくは不徹底がなければならぬのであつて、ヘーゲルの如くに考へるのではイデアはよく見ても單なる超越的論理であるに止まる。嚴密なる意味に於ては內在的論理であることを得ぬ。內在といふときはイデアそれ自體の中に多樣のエクジステンツを有し、その象徵的若しくは想像的空間の周邊にではなく、その領域內に多樣を有してこれにイデアの否定としての直接態の存在を與へると共に、これをイデアそれ自體の純粹自己意識的總合統一を

なすべき内面的必然的制約の矛盾契機たらしむるものでなければならぬ。この點に於てイデアその物の否定としてエクジステンツを改めて省みねばならぬヘーゲルでは、このエクジステンツの否定に於てイデアそれ自體の絶對自覺の統一になほ深き思索を積まねばならぬ必然を有する。認識論的に無限若しくは絶對問題の解決をなすといふのはヘーゲルのイデア論であるけれども、この解決には制約せられたるものを通じて無制約的絶對に進んでその統一を見ねばならぬものがなほ殘つて居るのである。

勿論かゝる統一は理知的直觀として見るときは全くこの二つの獨立契機の不可分的統一でなければならぬのであるから、思辨的契機の獨立すら最早問題とならぬ。この統一に於ては契機なる概念は全く一個の固有の新らしき意義に於て使用されねばならぬのであつて、契機の統一なるものは今やイデアの極に於ける統一でもなくエクジステンツの極に於ける統一でもなく、全くこの兩極の絶對的統一である。併しこの絶對的統一に於てはその絶對的同一性と同時に絶對的差異性を要求して居ることは否定すべからざるところであつて、この統一に於てもイデアは全くその性質を失つて居るのではない。又エクジステンツもそのエクジステンツたるの特色を失ふのではない。矢張そのエクジステンツたるの特色を維持するの反面をもたねばならぬ。イデアとエクジステンツとは互に矛盾契機として他を包含する點に於てそれ〴〵その絶對自覺に達せねばならぬのであるから、これをイデアからいへばその絶對自覺に於てはその絶對的同一性を否定せる絶對的差異性に於てエクジステンツを肯定すると共に、これを自己の絶對的自覺に於て見ねばならぬのであつて、その限りエクジステンツはイデアの絶對自覺の否定的契機としての純粹實在とならねばならぬ。こゝに初めて徹底せる意味に於てイデアの絶對觀念論がエクジステンツの絶對實在論と一致し、絶對的超越論

が絶對的內在論と合致し得るのである。イデアが自己否定のエクジステンツを媒介として絶對自覺に歸るといふことは、イデアは超越的なるエクジステンツを自己自身の中に取り入れてこれを自己の自覺存在論的存在の矛盾契機とすることである。ヘーゲルのまゝでは既に述べた如くイデアはエクジステンツの多樣を自己外に有するものである。隨つてその限り多樣をイデアの於てある象徵的又は想像的空間の周邊に於て有するに過ぎぬのであつて、この空間それ自體は一切の區別を超越せるものでなければならぬのであるから全く多樣の否定的空間の無であるに過ぎぬために、無といつても有に對立する無であるに止まつて居らねばならぬ。イデアは最後に於ては無媒介に存在を越えたるものとして單にこれを自己の中に否定するところの無の場所をしか見ぬのであるから、その無の場所の表現ともいふべき空間もヘーゲルでは單に存在を超越してこれを形式的に包むものでなければならぬ。隨つて正直にいふときはヘーゲルはその辨證法的自覺に於て自覺存在論の立場に達して居らぬといはねばならぬ。思惟と實在との絶對的統一といふことはヘーゲル哲學の絶對的眞理とするところであるけれども、嚴密に論ずるときはヘーゲルは實はなほこの眞理を確めて居らぬのである。

こゝに問題がある。この絶對的統一の直觀に於ては直觀するものとせられるものとの統一としてこの兩者をも超越せねばならぬから、この直觀一般に對應せる對象は考へられぬ。全く絶對無である。この無がその對象である。自己の底は絶對無でなければならぬといふことはこの絶對無を對象とする直觀に於て初めて考へられることである。自己の底に自己を限定する何物かゞあるならば自己が自己自身を限定するといふことはなくなり、隨つて眞の自己といふものはなくならねばならぬ。眞の自己なるものは絶對無の自己限定と考へられるものでなければならぬといふこと

は、この絶對無を對象とする直觀の自己限定に於ていふことである。この意味に於てはヘーゲルのイデアの辨證法的自覺が超越的形式的であつて、多樣の存在をイデアの於てある象徴的空間の周邊として居るといふことは止むを得ぬことゝ思はれる。しかしこの絶對無の自己限定によつて客觀的知識が成立し客觀的世界が見られるについては、この絶對無は無媒介に存在を超越してこれを包含し單にこれを自己の中に否定する意味の絶對無であつてはならぬ。存在を媒介とし、否定を媒介として自己自身の肯定に歸るところの絶對無でなければならぬのであるから、その限りに於てはこの絶對無はヘーゲルのイデアの象徴的空間に於てのやうに有限の有をその周邊とするものではなく、この空間それ自身の中にこの有を有し、その全體的同時性に於てこれを包含するものでなければならぬ。この意味でこの絶對無は有無を包含する絶對無でなければならぬのであつて、この無に於て初めて吾々は徹底せる意味で何物も見られない自己を見、生命を見ることが出來る。生命はこの無に於てあるものなる點に於て有の基體としての無たるを得れば、又この基體としての內在的統一原理として內在的理解の論理をもつことも出來るのである。ヘーゲルのイデアの論理が超越から內在に向はねばならぬと共に、その內在的理解の生命が時間空間の辨證法的圖式の媒介の論理をもたねばならぬところに生命があるのである。ヘーゲルはこの論理に於て生命の絶對的構造を明らかにする點に於て實はその哲學の眞理を明らかにせねばならぬ使命を有するといへる。

イデアの絶對的超越の形式的統一に止まつてこの構造を明らがにせぬのが實にヘーゲルの最大缺點でなければならぬ。既に述べた如くヘーゲルはイデアの認識に於てカントの總合判斷の根柢に横たはれる絶對認識の問題を解決せんとしてもイデアとエクジステンツとの聯關の認識に於て解決せんとせぬ缺點は必然的にこゝに到らしめて居るのであ

つて、その結果はヘーゲルでは必然的にイデアの絶對自覺に於ける對象の直接的構造の問題に觸れて居らぬ。ヘーゲルではイデアの絶對的自覺に於て生命を說いてもイデアの否定的媒介たる空間の基體を明らかにせぬから、生命それ自體として觀察するとき內在的理解の論理をもつことが出來ぬ。只神祕的に觀察する外ない。正直に論ずるときはヘーゲルのイデアの辨證法的自覺は存在論と關係のない生命論となり、この地上に生命を生命として現實具體的に活きて往く吾々自身の生命を明らかにするものでないと今日非難せられるのは止むを得ぬことでなければならぬ。獨逸の傳統的觀念論は時間に於て精神的實在の構造契機を見るのであつて、空間を以て外的對象の形式となし、これを以て眞實在に關係せしめぬのであるが、ヘーゲルもイデアの認識を見てイデアとエクジステンツとの聯關の認識を見ぬ限りに於てはこの獨逸傳統の觀念論の型を出るものでなく、隨つて基體なき生命の直觀に於て只その神祕的觀察に耽るのみである。ヘーゲルのイデアが空虛であるのは辨證法的空間圖式概念の缺乏によるのである。一體カントは純粹悟性概念の時間圖式を媒介とする限定的實現を見る點に於てその學說に大なる特色を有するものであつて、その限りに於てはカントは一切の對象構成を以て數學的に一般化する缺點を有するものであるけれども、この構成に於て豫想する物自體的存在の認識といふ問題になるときは、ヘーゲルと同じやうにカントは空間を以て自然の直接的規定と認めねばならぬことは否定すべからざるところであり、又事實カントはこれを認めて居るのである。只徹底して居らぬのみである。カントに於ても直觀を論理に結合するものは時間圖式に內在する空間圖式でなければならぬのであつて、この外に『經驗の類推』に於ける物自體的存在の事物の內在的合理性の法則は理解すべからざるところであるが、一般にこの論理を圖式を介して直觀に結合し得るといふことはこの兩者の對立關係にあるものが圖式の媒介によつて結合

せられるといふことではなく、本來この兩者が對立的であり隨つてその限り否定的でありながら肯定的であるから對立關係にあると共に相互聯關をもち得、この聯關の實現が認識であるといふ本質的關係が具體的なる媒介をなすに由るのである。隨つてその限りに於てカントではなほ十分明らかになつて居らぬけれども、時間に內在する空間及び空間に內在する時間の矛盾契機的關係の辨證法的圖式が對象の構成をなすのであつて、こゝにカントは實はその圖式論の圖式とは異なる辨證法的圖式の概念を必要とする。超越的對象が自己分裂若しくは自己否定によつて內在的論理の純粹自己意識の絕對的內在となるところの新圖式を要するのであつて、ヘーゲルはカントのこの新圖式概念を徹底するところに自然認識の概念を徹底せねばならぬ。

カントが既に述べた如く分析命題の總合から總合命題の總合に進んで辨證法哲學に足踏みを入れたといふことは圖式論的に見ればかくの如き關係があるのである。時間の實體化として空間を認めることは既に述べた如くカントでは第一版の『經驗の可能性に對する先天的理由について』以來見られるところであるが、殊に第二版の『觀念論々駁』に於て最も重要なる概念として見られるところであつて、『經驗の類推』に於て認めるところの物自體的事物の客觀的存在としての內在的合理性の法則はこの事物を時間に內在する空間圖式を媒介として思惟する場合の基體的論理の原則としてゞなければ理解すべからざることである。隨つてその限りカントの認識論はこの絕對的超越の存在がその矛盾圖式による自己分裂若しくは否定によつて純粹自己意識の絕對的內在とならねばならぬ點に向ふのであつて、この點に於てヘーゲルの辨證法はカントの時間圖式に內在する空間圖式によつてイデアのエクジステンツを慥めたる上、その基體的實現を媒介として主體の辨證法的自覺に歸つて認識を見ねばならぬといふことになる。この基體的媒介を離れ

てはヘーゲルのイデアは存在論的關係に入り込むべき機會もなく可能性もなくならねばならぬのである。その限りに於て空間圖式なくしては時間圖式は存在論的性格をもち得ぬといはねばならぬ。只空間圖式を媒介とする限りに於てのみエクジステンツはそれ自體存在せる絶對であり絶對的超越であるから、これを否定的媒介とするイデアの辨證法的自覺に於てはその絶對的自己否定から絶對的自己肯定に歸らねばならぬのであつて、これをエクジステンツから見ればその絶對的超越が自己分裂若しくは自己否定に於てイデアの絶對的內在の純粹自己意識に歸るのである。純粹自己意識は純粹實在としてイデアとエクジステンツとの矛盾契機による絶對的統一でなければならぬ。

ヘーゲルの問題はこの統一の存在構造を明らかにするにある。ヘーゲルのイデアの認識では既に述べた如く有限を無限の存在する空間の周邊に止めるものであつて、その限り辨證法的自覺に於けるイデアの認識は單なる超越的形式的統覺であるに過ぎぬから問題は總てこの點に觸れて來ぬ。併し眞の認識では本來この空間に內在する時間に於て、空間內に導き入れられたる有限的無限の存在その物をカントの統覺に於てのやうに構成的に理解せねばならぬのである。ヘーゲルのイデアに於て有限が眞理その物に達するといふことは既に述べた如く積極的には無限が眞理その物であつて、この眞理その物は同時に直接的に有限の眞理であるといふことでなければならぬのであるから、イデアが無限の多樣を自己自身の中に吸收してこれを自己のものとなすのみでなく、なほこれをそれ自身から發展せねばならぬのである。隨つて有限を無限に止揚するといふだけでは不十分であつて、この止揚されたる有限はイデアに於ける自己認識によつて認識されねばならぬのである。卽ちイデアはその純粹なる直接的自己認識に於て有限的無限その物をば認識せねばならぬのであつて、その限りに於てはイデアその物は對象の方面に移され有限的無限の立場に立たされ

ねばならぬのであるから、既に述べた永遠者の自己認識といふことは自己否定的態度と契機とをもたねばならぬことを忘れてはならぬ。有限的對象に於ては慥かにイデアは否定されて居るけれども、既に述べた如く有限的對象それ自體といふときは絶對的イデアを離れては考ふべからざるものであつて、エクジステンツはその限りイデアと絶對的に同一なる一面をもつと共に又絶對的に同一でない他面をもち、吾々はこの絶對的差異性のエクジステンツの認識によつてイデアの絶對的自覺とこの自覺に關する吾々自身の知識との統一を得ねばならぬのである。隨つてこゝにヘーゲルのイデアの自覺よりも吾々の認識は一層深き立場に立ち、吾々はこの深き立場への轉廻に於てのみ有限的對象に關する吾々自身の知識は絶對たるを得るのである。既に述べた如く對象はプロチヌスのやうにイデアの弱められたる寫像ではなく、絶對的にそれ自體固有の新らしき存在を有せるものでなければならぬのであつて、この新らしき存在がヘーゲルのイデアの超越的形式的なる統一以上に、イデアそれ自體の領域に於て內在的具體的なる統覺に於てあるといふ點に於て初めて絶對者の絶對認識といふことが考へられるのである。ヘーゲルはイデアとエクジステンツとの聯關の認識論に於て自覺存在論に進まねばならぬと共に、この存在論に於ける存在の吟味が更らに新らしき高き立場を要求するのであつて、こゝにヘーゲルはシェリングの自然哲學を克服して一層深き立場をもたねばならぬ理由がある。シェリングの自然も主體的であるがヘーゲルはこの主體の自己否定に出發する點で生命の哲學をもつといへる。

エクジステンツがイデアに止揚せられてこれと同一なるものとしてはエクジステンツはイデアに制約せられるけれども、イデアの否定體たる獨自の存在に於てはこれに制約せられるといふことはない。全くこれと獨立である。隨つて又イデアとは絶對的に異なれるものでなければならぬ。辨證法的にいふときはこのイデアと絶對的に異なれる

エクジステンツとしての對象それ自體はイデアの否定體であるのであるから、これを媒介としてイデアはその自己否定から自己肯定に歸り絶對自覺に於て一切の完了せる絶對眞理に達すべきは言ふまでもないところである。しかし辨證法的に見てかくイデアそれ自體の絶對自覺に歸らぬときは絶對的眞理を得られぬについては、イデアの否定たるエクジステンツその物はそれ自體眞理であると共に、その反面に於て完結せる眞理ではなく階段的媒介的眞理であるに過ぎぬからでなければならぬ。なほこれを他の言葉でいふならば存在論的時間を存在論的空間に於て實現し、多樣の基體的存在を明らかにするけれども、その基體なるものは主體の否定であるかぎり否定の否定としての主體それ自體の肯定の絶對的眞理を明らかにすべきことを基體の方面からも主體の方面からも要求せられて居るからであらねばならぬ。イデアが存在論的時間に內在する空間に於て時間空間の辨證法的圖式の上に立つものでなければならぬ以上は、一度はこの圖式によつて自己否定的にエクジステンツに發展するけれども、このエクジステンツに於てはその否定である點に於てイデアはその故鄕を發見すること能はぬ。全く故鄕を離れたる外在的否定的存在である。イデア自身がその故鄕に歸つて存在論的構造關係に自己自身を置かねばならぬのであつて、ヘーゲルのイデアの辨證法的自覺はこの意味に於いて新らたにその自覺存在論的構造を明らかにせねばならぬ。こゝにヘーゲルの辨證法は生命の辨證法となりその辨證法的先驗統覺に於てカントの先驗統覺によつて補はれてその認識論的體系を完くする。

勿論かゝる辨證法的先驗統覺に於て見るエクジステンツその物は最早それ自體獨立に存在する對象それ自體に止まるものではない。この對象それ自體とこれに對立する主觀それ自體との直觀的統一に於て根源的事實を見ることが出來る。ヘーゲルがその辨證法的自覺に於てイデアの絶對自覺と共にエクジステンツそれ自體の知識をもたねばならぬ

といふことはこの根源的事實を見ねばならぬといふことであると共に、この事實こそは既に述べた如く絶對無に於てあるところの事實として有無を超越せる絶對の事實である點に於て生命その物を直接表現するところの事實でなければならぬ。隨つて最早これを單なる根源的事實として存在論的にのみ深く解釋すべきではなく、生命その物の表現する身體として全く新らしき觀察を下さるべきものでなければならぬのであつて、ヘーゲルの辨證法はイデアのエクジステンツを確める限り必然的に自覺存在論となり、この存在論は又その存在構造の吟味に於て新事體の身體を見ねばならぬ。こゝに自覺存在論は必然的に人間學的哲學とならねばならぬ理由があるのである。イデアの絶對自覺に關する吾々自身の知識は辨證法的に見て必然的にこゝに達するのであつて、その限り吾々は認識論的に見てヘーゲルの辨證法を二重の階段に於て飛躍せねばならぬ。卽ちイデアの認識をイデアとエクジステンツとの聯關の認識に於て飛躍すると共に、この飛躍に於て見らるべきイデアの絶對的自覺とこの自覺に關する吾々自身の知識との統一に於て見らるべきイデアの本來的存在空間に於ける認識對象の構造の吟味に於て飛躍せねばならぬ。隨つてその限り今日吾々のもつべき哲學はヘーゲルの哲學とは可なり大なる距離に於て異ならねばならぬのであつて、ヘーゲル以後自覺存在論の哲學が發達し又人間學的哲學が發達したといふことは偶然でない。

カントは既に述べた如く對象の構成よりもこの構成に豫想されたる物自體を認める點で明らかに二元論であるのを、その根源の直觀的悟性の直觀若しくは總合に於て一元論的に統一せんとする。ヘーゲルでは一元論であるには違ひないけれども、そのイデアの自覺に於ては有限その物とかけ離れたる無限の統一を見るものであるから、認識論上ではイデアの辨證法的自覺といふことは既に述べた如く形式的であつて多樣を自己以外に閉め出して居る。全く超越

的形式的であつて直接的には只この多樣をその純粹可能性に於て制約せるものに過ぎぬ。隨つてヘーゲルもなほ絕對的超越的論理に止まるものと見ねばならぬのであるけれども、この超越的論理の無限的認識では有限的認識の先驗論理に對應せる形態を有し、隨つて又その限り象徵的又は想像的空間の內容が構成的でなければならぬことは否定すべからざるところである。隨つて又その限りヘーゲルはカントがその批判に於て對象の構成ではなく、この構成の豫想となれる絕對的對象の構成を明らかにせねばならぬ範例を示せるに係らずその繼承者としてこれに從つて問題を解決して居らぬといはねばならぬ。ヘーゲルはなほ全體者を具體的に把握して居らぬから、生命若しくは自己認識といふ問題には實はなほ具體的に觸れて居らぬ。隨つてヘーゲルでは嚴格に論ずるときはそのイデアの絕對的超越の問題から絕對的內在の問題に移ることは絕對的に不可能であるといはねばならぬのであつて、ヘーゲルは元來この移行を考ふべき立場に立つて居らぬのである。こゝにヘーゲルは身體の問題に對する哲學の本來的觀察を缺ぎ純粹自己意識の絕對的內在性の人間といふことを正式に哲學の問題となし得ぬ理由がある。

かくの如きことはヘーゲルとしては最も遺憾なることでなければならぬのであるけれども、その哲學の中心命題たるイデアの辨證法が超越的形式に止まる以上は止むを得ぬことでなければならぬ。ヘーゲルはカントの先驗的超越的總合に比較するときは絕對的內在的總合の立場にある。併しこの內在的總合といふことは既に述べた如く一切の有限を無限に止揚し、有限的對立關係を廢棄せる場合に於ての內在的總合であるから、嚴格に論ずるときは一切の關係を離れた單一體に於ける內在的總合に過ぎぬのである。卽ち前に述べたる言葉でいふならば有限を自己外に閉め出した場合の無限の超越的形式的總合に過ぎぬのである。故にヘーゲルの哲學では正直にいへば只カントの觀念論を神祕的

に深く探究する點に於て徹底するのみであるから、事實に於て地上生活の現實的具體性を離れたるヘーゲル自身の觀念的世界を見て居るものに過ぎぬのであつて、その限りに於てはヘーゲルは一元論に滯ぎ着けて居るけれども眞實に於てはなほ抽象的一元論たるを免れぬのである。カントでは感性と範疇との二つの獨立契機を總合によつて媒介する點に對象を見るのであるが、この總合に於ては二つの對立契機はなく只生産せられたる對象があるのみである。對象に於てはこの二つの獨立契機の對立は消滅して全く中和せられたるものを見るのみである。こゝに實はカントの誤謬があり不徹底がある。總合によつて對象を生ずるのであるけれども、この對象には依然として對立契機が存在し、隨つて又その總合も嚴存せねばならぬのであることは既に述べた通りであつて、カントの先驗統覺といふことは本來的にはヘーゲルの辨證法的矛盾契機の對立を證明するものでなければならぬ。カント及びその後の哲學者がこのことを發見して居らぬのが哲學界の大なる缺點でなければならぬのであつて、ヘーゲルはこの二つの對立契機を承認した點に於てカント哲學の行き詰りを突破して新らしき出發點を作つたことはよいけれども、イデアの絶對的辨證法的自覺の領域その物の存在論的特質を見ることを忘れて只その形式的統一をしか觀察して居らぬ。隨つて吾々はこの特質及び意義を明らかにしイデアそれ自體の絶對的否定的矛盾契機としての存在その物を明らかにせねばならぬのであるが、この存在その物が根源的事實として生命その物の否定的矛盾契機でなければならぬ點に於て身體なる名に於て考へらるべきものでなければならぬのであるから、その限りに於て自覺存在論の存在構造は身體を契機とするものなる點に於て全く新らしき考察をなさねばならぬ。

眞理に於てはカントの哲學に於ける對象の構成は無限的對象の構成であるが、この構成はその先驗統覺に於ては辨

證法的矛盾契機として身體を主體に內在せしめねばならぬ。この點の明らかになつて居らぬのがヘーゲルの辨證法の最大缺點でなければならぬのであつて、その限りヘーゲルの辨證法は生命の論理としては矛盾的契機を缺ぎ、基體論なき生命の神祕論として獨逸哲學固有の觀念論の缺點に陷つて居るのである。隨つて吾々はこの觀念論の誤謬を訂正せねばならぬのであつて、この訂正に於て見らるべきイデアそれ自體の象徵的空間に於て構成さるべき對象はカント的にはその純粹先驗統覺に於て見らるべき對象には違ひないのであるけれども、最早物自體的事物としての對象ではなく、イデアの絕對自覺の辨證法的先驗統覺に於て見らるべき新對象としての身體の矛盾契機でなければならぬのである。眞の認識は有限的なるものを通じて無限的なるものを見る認識でなければならぬが、この無限的なる對象は眞に具體的なるものとして生命その物の表現である身體でなければならぬ點に於て認識論上最も注意される。勿論認識論上に於てはこの身體はイデアの自覺としてその自己直觀であると同時に又その否定體なるエクジステンツその物の直觀でなければならぬのであるから、その直觀なる點に於てこの兩契機は不可分的に統一せられて終つて思辨的にも最早獨立契機を見ることは出來ぬ。全く絕對的不可分的統一體を見るのである。吾々は生命において二つの矛盾契機の不可分的統一を見ねばならぬのであつて、思辨的矛盾契機も最早この場合には問題とならぬ。直觀的單一の表徵として全く固有の新らしき意味をもつて居る。併しこの統一を以て只超越的形式的なる單一的形態の統一と考へることは不徹底であつて、そのイデアの象徵的空間に於てはエクジステンツその物がその全體的同時性に於て新對象の身體に構成されて居らねばならぬのであるから、その限りに於ては身體はカント的には構成されたる對象でなければならぬのである。假定のない根源的事實の認識といふことはこの身體の構成に於て見られるのであつて、その限りに於

て認識の論理は生命の構成である。認識論上イデアの絶對自覺とこの自覺に關する吾々自身の知識とが統一されねば眞の認識が見られぬといふ點に於て人間學的立場を豫想するのも、又この認識がその本質に於て實踐的であるといふ性質をもつて來るのも認識がこの身體の構成であるといふ點から生ずる。

ヘーゲルの辨證法が汎論理であつて實踐的でないといふ理由もこゝに至つてよく理解せられる。ヘーゲルが事物を見て身體を見ぬ以上はこのことは止むを得ぬことでなければならぬ。實踐はこの身體を見るのみならず、なほこれを矛盾契機とするイデアの絶對自覺に於て精神その物の活動を見ぬ以上は解決される問題でない。精神はイデアの辨證法的自覺であるからヘーゲルには眞の意味に於て精神を見るべき哲學を有するのであるけれども、既に述べた如くこの自覺の要求する象徵的空間に於ける對象の構造を明らかにせぬから、それ自體獨立に存在する構成されない身體が精神の矛盾契機として存在することを知らぬ。實踐問題に本來的に觸れぬのである。只イデアの直接的否定性に於て身體を神祕的觀念論的に見るのみである。隨つて實踐といつても只その主觀の反省に於て實踐の概念を論じ得るのみである。併し眞の實踐はこれとは反對に自己に對立する矛盾契機の克服により、否、なほ適切にいふならば既に述べた如く自己内に存在する矛盾の否定的契機の克服によらねばならぬのである。隨つてこれを認識論的にいふならばイデアの絶對自覺に於ける矛盾契機としての身體その物を否定的媒介とする高次のイデアその物の自覺に於てゞなければ見られぬのであつて、認識論はヘーゲルよりも深き根據に進むと共に實踐論もまた一層深く解されねばならぬ。

自然を克服するといふことは自己の中にある身體の克服である。己に克つて禮に復るといふことが認識であり實踐であつて、その限り知行合一といふことがいはれる。認識はこの身體の否定的契機を感性的制約とする精神の對象的構

或であつて、眞の認識は有限的無限を通じて無限的無限を認識することであるといはれるのは、この身體の矛盾契機を通じ、隨つて感性的限定を通じながらその辨證法的自覺に於て無限その物の總合的構成を見得るからでなければならぬ。人間は有限でありながら無限を認識する。これが一體嚴密なる意味でカントの人間悟性の認識であるべきことは斷るまでもないところであつて、カントの人間悟性の認識論はもと〳〵感性的矛盾契機たる身體の克服による實踐を意味するのである。既に述べた如くカントは『先驗分析論』の『概念の分析論』の劈頭に於て吾々自身の悟性能力その物を分析して先天概念及びその純粋使用一般を明らかにするを以てその批判哲學の任務とすべきことを高調して居るが、この思想は人間學的立場を豫想するものでなければならぬのである。吾々人間の有する感性的直觀の多樣を吾々人間の悟性能力としての範疇によつて統一するところにカントの先驗統覺としての認識があるのであるが、この感覺的内容が物自體の感觸による表象であるといふのがカントでは第一問題でなければならぬのであつて、物自體が身體の矛盾契機として内在するから、その否定的實現の自然認識に於て感觸の内的時間が見られ、この時間を圖式的媒介とする先驗統覺がカントの認識問題となるのである。物自體の認識又はその對象的構成といふことは眞實に於てはカント哲學の最も重要なる認識論の中樞部をなすものでなければならぬのであつて、少くともカントが『先驗感性論』に於て問題とせる物自體を認識對象として構成することはカントの認識論の落付く先きでなければならぬことが分る。カントの物自體は認識主觀に外的否定的對立をなすものとして感觸の基體であつて、これを超意識的意識の自覺的認識にもたらす點にカントの身體を直接的媒介とする純粋自己意識の認識があるのである。その限り認識は行爲的主體の行爲であるといへる。

カントの純粹先驗統覺の本來からいふときはエクジステンツは矛盾的基體であり、隨つて又身體は矛盾的基體として構成されざる直接的存在面を有することは勿論であつて、辨證法的認識の否定契機として內在し、その限りに於て否定的媒介の論理に於て吾々は身體を媒介とする感性的內容の悟性的統一を得られるのである。こゝに於てか私は初めてカントの『先驗分析論』の認識批判から出發してその根據を明らかにするまでに兎も角も達したといふことが出來ると思ふ。ヘーゲルによれば精神は卽自的對自的本質であると同時に意識として現實的に實在し自己自身を表象するものであるといふ。卽ち辨證法的自覺のイデアが精神であるから、ヘーゲルでは精神は自己意識として現實的に實在し隨つて自己自身を表象するものである。併しヘーゲルの如くイデアが眞理に於て事物を自己自身の固有の領域から閉め出して空虛の單一的統一を保つに過ぎないものであつては、その自己意識又は自己表象といふことは果して認識上の原理となり得るものであらうか。ヘーゲルの如く精神が自己自身から自己自身の中に世界を展開し世界に於て表現する理性であるについては、精神それ自體の中に矛盾契機として世界を有するのみでなく、なほこれを固有の自己自身の矛盾契機の身體として有するものでなければならぬ。この基體的矛盾契機を離れて精神の世界的發展及びこれを媒介とする自覺といふことは考へられるものでなく、身體の矛盾契機を離れてその辨證法的發展といふことは考へられるものではない。身體をその直接性に於て明らかにせぬのがヘーゲルの缺點であつて、ヘーゲルは身體を否定的媒介とする辨證法を明らかにせず、イデアそれ自體の固有の領域に於ける對象の特質及び意義を明らかにして居らぬから、その哲學は最後の最も重要なる點に於て遠慮なくいへば漠然として來る。根源的事實として明らかにせねばならぬ身體を物自體的自然と同一視するの缺點を有し、事物を根源的に觀察すべき人間悟性の純粹自己意識を離れて認識を

論じ行爲的主體を客觀的理知的に觀察するやうな誤謬に陷つて來る。ヘーゲルでは嚴密に論ずるときは身體から遊離した無媒介の自己意識があるのみである。これを逆にいへばこの意識から遊離せる無媒介の身體があるのみである。隨つて嚴密に論ずるときは行爲的主體としての吾々人間の認識といふことは全く論ぜられない立場に陷つて居るのである。ヘーゲルはカントの超越に對して內在的に深くその內面に徹底する方面に進んだのであるけれども、既に述べた如くなほその內在性に於て徹底を缺いで居る。超越的よりも內在的に進み、カントの統覺的認識で觸れることの出來ないものを認識にもたらす點に於て眞の認識を見るといふことはヘーゲルでは未だ見ぬところである。思惟と實在との絕對的統一といつてもなほこれは同一哲學に於て見る超越的事實の統一である。假象の上に立てる眞理であるに過ぎぬ。眞の根源的事實に出發する眞理ではなく、直接的なる活きた事實の上に立てる眞理ではない。理知的に考へられたる假定的事柄の眞理であるに過ぎぬ。この意味に於てヘーゲルが思惟と實在との絕對的統一の眞理から出發したといふことは認識論上まだ哲學的根本的眞理を示すに足らざるものである。

吾々はこの眞理よりもなほ深く根源的事實に進んでその直接的內在的理解の領域內に於て哲學的眞理を求めねばならぬのであつて、吾々はこの認識論的根源に於て對象の構成に豫想されたる絕對的對象の構成として身體を見、構成されない對象の構成に於て身體を見、その限定に於て有限的對象的認識とその根柢に於て豫想されたる無限者の無限認識とを同時に解決するのである。勿論身體は既に述べた如く根源的事實である。その限りに於ては既に述べた絕對無に根源するものであつて、その直覺的なる起原に於て絕對的生命といふの外何等の言葉を以てするも適當に呼稱すること能はざるものである。身體と精神との思辨法的契機に分つことも不可能である。全くこの兩者の統一せられた

る絶對的生命の存在を見るのみである。吾々はこの存在を身體といふのである。併しこの絶對的統一の生命をかく見るといふことは先驗的同一哲學の超越に於ていふことであつて、この超越がその自己分裂若しくは自己否定に於て身體を直接的に絶對的媒介とする辨證法的自覺に於て純粹自己意識の絶對的內在を導かねばならぬ。このことは既に前節で述べたる直覺その物の矛盾契機の內在から見ても明らなるところである。絶對的同一といふことは絶對的差異を含む辨證性をもつのである。身體は根源的事實としては構成されないものであるけれども、これをも否定的契機とする精神それ自體の絶對自覺の生命がなければならぬのであつて、この生命の自覺に於ける身體の構成を明らかにする點にカントも認識論の根本問題をもつ。この點に於てカントは辨證法的先驗統覺を明らかにすることをその哲學の中心課題となすべき使命を有するのであつて、その限りカントの先驗統覺は人間學的先驗統覺であるといへる。既に述べた如くカントの有限の客觀的認識の個別的經驗には神の自己認識がなければならぬ點に於て、客觀的世界の物自體的象徵的場所がなければならぬのであるけれども、この場所もなほ最後の意味に於て存在の眞の場所を示すものではない。この最後の場所はそれよりもなほ深く身體的存在の象徵的空間でなければならぬのであつて、身體はこの空間に於てあるものとして觀念的にして實在的であり、唯心的であつて唯物的なる感覺的印象の意識的統一としての認識を何等の假定もなき意味に於て導き出すを得るのである。私は前に有限的對象それ自體といふときは絶對的イデアを離れては考ふべからざるものであると共に、その認識はこのイデアの自覺に關する吾々自身の知識の絶對性によらねばならぬ點に於て吾々自身の認識はヘーゲルのイデアの絶對自覺よりも深き立場を要する點について述べたが、實際吾々の知識はこの絶對自覺に於ける矛盾契機の否定的實現を媒介として見られるものなる點に於てこの自覺よりも一

層深き立場のあるを必要とするのであるけれども、ヘーゲルのイデアの辨證法的自覺は認識論的には身體を見ぬ點に於てこの最後の深き根據にまで達して居らぬのであつて、その限りヘーゲルではまだカントの先天總合判斷の最高原則を發見せねば、隨つて又吾々人間の認識を發見して居るのではないのである。

こゝに於てか私はヘーゲルのイデアの辨證法が私の第三節以來述べて來て居るやうにその否定的契機なるエクジステンツに注意する點に於て自覺存在論から人間學にまで發展せねばならぬ理由は明らかになると思ふ。私は前節の終りに總合判斷の最高原則はヘーゲルのイデアでいへばその絶對自覺の知識とこの知識に關する吾々自身の知識との統一に於て見ねばならぬといつたが、この統一はこの人間學的立場に於て發見し得るところである。ヘーゲルの辨證法批判に於てイデアを既に述べた如く für uns an sich と見るに對してエクジステンツを an sich für uns と見るといふことはこのイデアとエクジステンツその物とがその背後に於て人間學的立場を豫想するといふことを強く認識論的に物語るものでなければならぬのであつて、この人間學的立場に於て吾々は初めて感性的制約を必然とするカントの人間悟性の認識問題を永遠に解決するを得、カントの先天總合判斷の根柢に隱れたる命題としての永遠者の永遠的認識に於て吾々人間の有限的認識の問題を完全に解決するを得る。吾々の感覺はロッチェのいへる如くそれ自體意味を有せるものである。吾々はその認識に於て有限的對象の無限的眞理を得られ、有限的存在の人間でありながら無限的認識を得られる。のみならずこれが一體身體の矛盾契機を媒介とするものなる點に於てシェリングの主體的自然哲學その物をも克服し、その自己否定を媒介とする辨證法的先驗統覺なるものとして對象の構成は構成されないシェリングの自然の新構成である點に於て認識の原則は直接實踐の原則となる。自然を認識するといふことはその活きたる生

命の上に社會國家を建設する實踐を必然とする。身體を否定的契機とする吾々人間の認識に於ては知識も根源的には行爲的事實なのであるから、吾々はその總合判斷の最高原則に於ては生命その物の辨證法的自覺として認識の原則を以て直接的に實踐の原則とするのである。隨つてこの實踐の原則に於ける辨證法的先驗統覺に於て見る對象としての身體の構成を明らかにすることがカント的に見て先天總合判斷の最高原則の決定を見るになければならぬことであつて、カントが感性的制約を必然とする人間悟性の先驗分析に於て認識の先天的法則を規定せんとしたことは、この身體の構成卽ち根源的事實として構成されない身體の構成に於てヘーゲルのイデアの絕對自覺とこの自覺に關する吾々自身の知識との統一としての認識の最高問題を解決することにもなる。

こゝに於てか私は極く大略に過ぎぬけれども以上述べたところによつてカントの總合の最高原則の批判を一應終了せるものと考へてよいと思ふ。カントがこの論文の初めにあたつて私の述べたやうに分析命題の總合から總合命題の總合に進んでその先天總合判斷の問題を解決せんとしたといふことは、その理知的直觀を通じてヘーゲルのイデアの絕對自覺よりもなほ深く攻究さるべき問題を提出するものであつて、吾々はこの攻究によつて身體を發見し、これを矛盾契機とするイデアの辨證法的自覺に於て認識を見ねばならぬのである。ヘーゲルのイデアの辨證法ではイデアの絕對自覺に於てエクジステンツをイデア自身の存在する象徵的空間以外に閉め出して居る點に於てその辨證法は認識論としては殆ど大半の價値を失へるものとなり、超越的形式的なるものとして正直にいふときは概念的イデアの抽象的辨證法となつて居る。私はカントの理知的直觀に出發して思惟と實在との絕對的統一を以て根本的眞理とするヘーゲルのイデア論のためにこのことは最も惜しむべきであると思ふが、旣に述べた如くであるからこれについてはカント

自身にも罪がある。先驗統覺に對するカント自身及びその後の學者の見解が誤つて居るのである。言ふまでもなくカントは經驗的統覺を理知的直觀に結合する點に於て純粹統覺を見た點では、經驗の制約と經驗の對象の制約とが純粹に一致するものと考へて居るのであつて、カントのこの思想には總合に於ては思惟とその內容との二元的對立がなくなるものとする思想が先驗的同一哲學的に承認されて居るのであるけれども、正直に論ずるときはこゝにカントの不徹底があるのである。純粹統覺に於ては物自體的實在とこの實在の中に發見されない主觀その物の絕對的同一化があるといふのがこの場合に於けるカントの眞意であるけれども、この絕對的同一化の統覺に於ては私の既に詳しく前節でも論じたやうに、この物自體的對象が矛盾契機として認識主觀に內在せねばならぬのである。ヘーゲルは既に述べた如く直接カントのこの辨證法的立場を繼承して且つこれを發展せるものであつて、イデアの辨證法に於てはその否定的契機たるエクジステンツの絕對的超越性を確めたる上で、これを媒介とするイデアの絕對自覺を見ねばならぬ。而して又この自覺に於ては當然イデアそれ自體の象徵的空間に於けるエクジステンツの自覺存在論的構造を明らかにする點に於て人間學的立場に進展せねばならぬ筈なのである。吾々はこゝに最後の意味に於て觀念論と實在論とが絕對的に統一せる根源的事實に於て認識を見られ、隨つて經驗の制約が經驗の對象の制約であるといふカントの最高原則を承認すべき最後の立場を得られる。而してまたそれが身體の內在によつて働く人間精神の悟性的必然の認識たることも知り、要するにカントが人間悟性能力の分析によつて範疇の使用一般を明らかにするといつた先驗分析の事實を承認してその先天總合判斷の隱れたる命題とするところの絕對者の絕對的認識なる命題の解決にまで進んで認識問題のアルファーとオメガーとを同時に解決する意味で一切問題を解決して何等の滯るところもなく、吾々人間の總合判

斷の最高原則を發見し得るのである。

カントの原則は總て先天的見解に於ける固有の認識法則を發見するにあるが、このことはカントの先驗分析の場合のやうに純粹統覺といふことを形式的と同じ意味に解し、隨つて超越的意味のものたるに止めるときは必然的に客觀的妥當の數學的原則を導來するの外ないものとなるのであるけれども、元來カントの先驗統覺の意味はかゝる超越的形式にあるのではなく辨證法的矛盾契機の內在的發展にあるのであるから原則の概念もその限りに於ては變更されねばならぬ。カントは『純粹悟性の一切の總合的原則の體系的表現』の初めの二節卽ち『直觀の公理』と『知覺の豫料』に於て數學的原則を論じ、後の二節卽ち『經驗の類推』及び『經驗的思惟一般の公準』に於て力學的原則を論じて居る。數學的原則から力學的原則に進んだのは力學的範疇の概念を通じて物自體的豫想に進んで居るからである。それだけに實はカントでは物自體的豫想の根據に進んでその構成を問題とせねばならぬ超意識的意識の認識問題を有すること既に述べた如くであると共に、これを辨證法的先驗統覺に於て解決せねばならぬ必然の課題を有し、結局人間學的立場の辨證法的先驗論理に於て一切を解決せねばならぬ必然の使命を有するものといへる。隨つてカントの原則の概念もこの點を中心として見直して往かねばならぬ。全く改められたる先驗統覺に於て見ねばならぬのである。ヘーゲルがカントに歸らねばならぬといふのもこの點に於てゞある。ヘーゲルのイデアそれ自體の領域に於て身體の辨證法的先驗論理的構成を見ねばならぬ立場に立つカントの眞意では、イデアの絕對自覺たる精神に於て認識を見ると共に、身體がその辨證法的矛盾契機でなければならぬのであつて、眞の認識の絕對性では絕對的否定的契機の身體を媒介として自然を構成するのである。この意味に於てカントの認識及びその原則の概念はヘーゲルのイデアの辨證法哲學よりも

深き立場に進んで解決されねばならぬ。カントは感性と悟性との根源的統一に於て認識を見るのであるから、理知的ではなく人間學的であるとか、又この統一の內面的超越に於て意志の優位を見るのであるから、實踐的であるといふ思想で、カントの哲學を以て人間學的であるといふのには私は贊成すること能はぬ。これでは如何にその論理が精到でも要するに只心理的經驗の一般的先天的事由を示すものにしか過ぎぬ。吾々は物自體的自然の中に生命を有し、隨つてこれに規定されながら反對にこれを根本的に規定し構成するのであるといふやうな事實や、又カントが總合命題の總合に於て哲學本來の問題を提出して居るといふやうなことは深く省察すべきであつて、私は寧ろ孔子の述べて作らずといふ態度を以てカント、ヘーゲルに對するところに本來の意味に於ける人間學的哲學の認識論的原則が見られ隨つて又哲學體系もこれから見られるのではないかと思ふ。(終)

この節の稿は昨年六月に書き上げたものである。今日印刷を校正して見ると書き改めたい點や書き足したい點は多々ある。併し印刷後であるから思ふ通りにすることも出來ぬことがあつて、多少の訂正を加へたのみである。他日の機會をまつて考へて居るところは十分に述べる。